

速射砲中隊 乗馬小隊始末記

静岡県 木下 富士男

私は昭和十九年十月六日、三十歳で長男四歳と生後九ヵ月目の次男を残して中部第三部隊に入隊しました。

一、二、三日後に宇品港に集結する。護衛艦に守られて、朝鮮釜山港に上陸する。夜行列車にて着いた所は満州国海拉爾でした。第七百部隊要員となり、その後第五百十五部隊（宰）歩兵第二百五十五連隊速射砲中隊内乗馬小隊に編入された一員です。一兵舎で朝夕の点呼など起居をともししていた。隊員は約四十名で小隊長は狩野潔少尉でした。

人事係は下田曹長で次のようなことを話して下さいました。「ノモンハン事変で騎兵部隊は装甲化されていき、軍馬は一般歩兵部隊の連絡斥候用に廻され、これが乗馬小隊である。」

一期の検閲が終るや一等兵に進級した。陣地構築に
出向した者もいた。行く先は分からない。

昭和二十年八月九日、日ソ戦闘状態に入り、乗馬小隊からも一地区安保山陣地へ福島軍曹以下二十名ぐら
い出発した。激戦の末、福島軍曹以下十数名が戦死し、
生存者五名であった。私は中野大尉の指揮に入り南下、
興安嶺に向かった。先頭は狩野少尉の乗馬小隊、中野
大尉の第一大隊、第二大隊九中隊、満警百十九隊の順
であった。

途中八ヶ石附近で、中野大尉の命により前進中の部
隊を追う。部下は開拓団より召集の武田二等兵で一緒
に行動する。武田は満語もうまく、私も大変助かりま
した。八ヶ石付近でソ連軍に会い一難去った。

八月十一日、連隊本部の角田准尉、松本と出合い合
流する。六名で免渡河に着く。その折、ソ連と交戦し、
友清中尉自決する。私は連絡に出て後の部隊はどうな
ったか分からない。後で分かったが八月十七日六時イ
レクト河を渡ったころ、突如、山上より急射を受け、
抗戦三十分にして多くの負傷者を出した。だんだん包

囲まれ、中野大尉一行は玉砕した。生還者は鳥塚軍曹以下八名と聞く。

笹山戦鬪は言語に絶するものであった。私等数名は山に入り川を渡り満人部隊にも厄介になり、八月十四日開嶺の飯塚中隊に復帰、申告、その指揮下に入り、三大隊本部より少し離れた陣地のタコツボに入る。

軍用道路を前に速射砲中隊、後方に乗馬小隊四名であった。八月十六日運命の時が来た。十七日十時までソ連軍戦車二〇〇両に包囲される。第一肉攻速射砲、第二肉攻乗馬小隊外と十キロ爆弾を背負い状況を見る。戦鬪では速射中隊がソ連軍戦車二両を擱座させるも後からさらに戦車が前進してくる。私は隣の川本上等兵に頭を出すなど声を掛けたが間に合わず、頭をやられて戦死す。この戦鬪で飯塚中隊長も戦死され、十数名の戦死者が出た。

戦鬪が若干少なくなつたと思うころ、車にて白旗を掲げた将校が、良く分らないが「日本軍射撃止め」と呼ぶ声を聞く。私はまだ信じられなかった。指揮官の命令を聞くまで、付近では戦鬪の音も聞いた。中隊

長の遺体を埋葬し、園田見習士官が代理でその後の指揮を取る。生存者六十数名は最後まで戦うんだと山上より軍用道路を見ると、長蛇のように行進して行く友軍を見る。

興安嶺山中を二、三日歩き南下し、ある開拓団に入る。わたしたちは軍服なので、どの開拓団でも老人子供ばかりとなつて困つていたところで、団長も私らと一緒にいてもらいたいとの考えもあったようだ。私ら六十数名も最後には開拓団に分散した。毎日のように匪賊が来て食糧、衣類、車、牛、豚など持ち去り困つた。最後に団員を集め、今から人民裁判を行う通達あり、私らは両手をしばられひどいめにあつたが、まあ助かった。団長以下二、三名の人が銃殺され、私らはその遺体を埋葬した。

皆との話し合いで抱き合わせの夫婦として暮すこととしたが、その後の状況が分からないため街に出ることにした。龍江省甘南県甘南街であった。

毎日子供を連れて満人の使役に行く。満語の勉強もしなくては一日なりとも過ごせません。二十一年八月

二十六日は命令があり、日本人全員チチハルに出向せよとのことで支度し、ダーチャでは子供、老人を乗せ、私は後方よりついて行く。幾日かかったかは分からない、途中私らは事故なくチチハルの関東軍の倉庫に収容される。チチハルの町は邦人で一杯であった。

到着順に班に分けられ収容所に入った。ところが皆んなの顔も良く分からない。ひげも伸びてやせた人も沢山いた。二日後、「木下じゃないか」と言われ、良く見たら佐々木上等兵と杉本一等兵であった。一地区の戦闘の様子も佐々木さんより良く聞きました。杉本一等兵は某開拓団にいたとのこと。速射砲の今坂さんも病気でおられ、私と飯塚さん二人で出発まで介抱して、なにがなんでも故国の土をふむまでと力づけました。その彼は私より早く熊本の実家へ帰られた。

その後、お礼状が来まして、現在暮しているのも在満のおり、お世話になったためとのこと。私も中部第三部隊に入隊時、同年兵七名であったが、ほとんど一地区で戦死、笹山は開嶺戦で戦死され、現在私一人になりました。このため戦友会にも速射砲中隊の方

と一緒に出席させて戴いております。

チチハル出発は二十一年九月七日、新京、奉天、錦川、コロ島まで病氣、死亡者が多く出て、また汽車は引き込み線に入ったものの出るまで数日をついやすなどのこともありました。

コロ島出発は十月十九日、「撰津丸」九千六百トンで故国佐世保港へ向かいました。船内で病氣、死亡者があり、佐世保港外に停泊、十一月三日無事上陸しました。上陸後、援護局に申請し、六日品川駅行の車中の人となり我が家へ。

最後に北満で亡くなった開拓団員、戦友の方々のご冥福を祈ります。

私の初年兵時代

富山県 新田 政之

私が小学生のとき、日本が「満州事変」を起してから六十年。また酷寒の満州の兵営で、現役の初年兵で